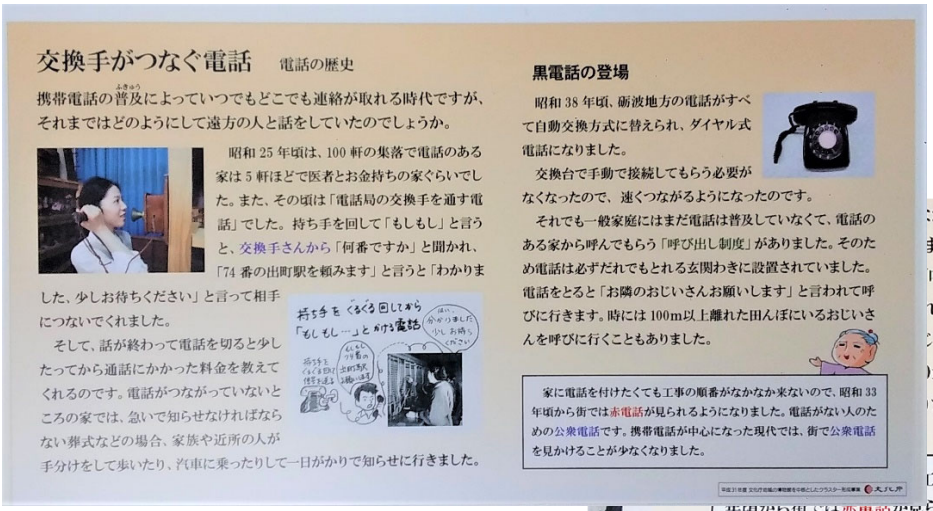
１（２）多様な対象者のための学習講座（Ｒ１年度地域と協働した博物館事業）

④全体・展示説明　民具説明サイン８種類



交換手がつなぐ電話　電話の歴史

携帯電話の普及によっていつでもどこでも連絡が取れる時代ですが、それまではどのようにして遠方の人と話をしていたのでしょうか。

昭和 25 年頃は、100 軒の集落で電話のある家は 5 軒ほどで医者とお金持ちの家ぐらいでした。また、その頃は「電話局の交換手を通す電話」でした。持ち手を回して「もしもし」と言うと、交換手さんから「何番ですか」と聞かれ、「74 番の出町駅を頼みます」と言うと「わかりました、少しお待ちください」と言って相手につないでくれました。

そして、話が終わって電話を切ると少したってから通話にかかった料金を教えてくれるのです。電話がつながっていないところの家では、急いで知らせなければならない葬式などの場合、家族や近所の人が手分けをして歩いたり、汽車に乗ったりして一日がかりで知らせに行きました。

持ち手をくるくる回してから「もしもし…」とかける電話

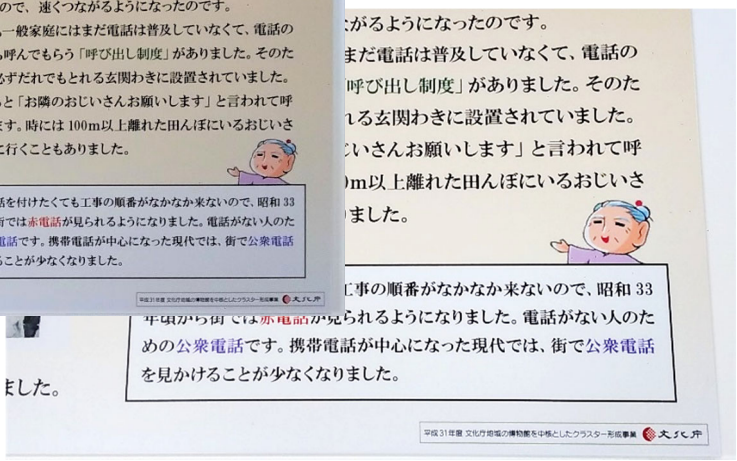
黒電話の登場

昭和 38 年頃、砺波地方の電話がすべて自動交換方式に替えられ、ダイヤル式電話になりました。

交換台で手動で接続してもらう必要がなくなったので、速くつながるようになったのです。

それでも一般家庭にはまだ電話は普及していなくて、電話のある家から呼んでもらう「呼び出し制度」がありました。そのため電話は必ずだれでもとれる玄関わきに設置されていました。電話をとると「お隣のおじいさんお願いします」と言われて呼びに行きます。時には 100m以上離れた田んぼにいるおじいさんを呼びに行くこともありました。

家に電話を付けたくても工事の順番がなかなか来ないので、昭和 33 年頃から街では赤電話が見られるようになりました。電話がない人のための公衆電話です。携帯電話が中心になった現代では、街で公衆電話を見かけることが少なくなりました。



「電話の歴史」　　**表示の拡大図**　→

季節の展示から効果的だったものから作成

田植え作業と「さつき見舞い」

春の田んぼの忙しい時期を「さつき」といいます。4月から6月頃です。

お嫁さんにとって初めてのさつきには「さつき見舞い」として、田植え道具などをお嫁さんの実家からもっていく習わしがありました。

着るものは、お嫁さんらしく赤い色で整えます。黒い襟の上着「もじり」に半幅の帯をして、下に腰巻きをつけます。春先はまだ寒いので、綿の入った袖のない「どうげん」を着ます。娘の着るものはすべて実家の母親の手縫いです。

もじり　どうげん

こて　と　きゃはん

昭和 20 年代は、苗を植えるために田んぼに入るときは裸足でした。田植えは何日も続くので、手には「こて」、足には「きゃはん」をつけて皮膚を守ります。

晴れでも雨でも頭には、手ぬぐいをつけて、「すげ笠」をかぶりました。

すげ笠

このさつき見舞いには、餅がつきものでした。3段か5段のお重に餅をつめて、重布団をしいて風呂敷に包んで背にかついで運びました。

「さつき見舞いと春作業」

らちをかける　らち（中耕除草機）の登場

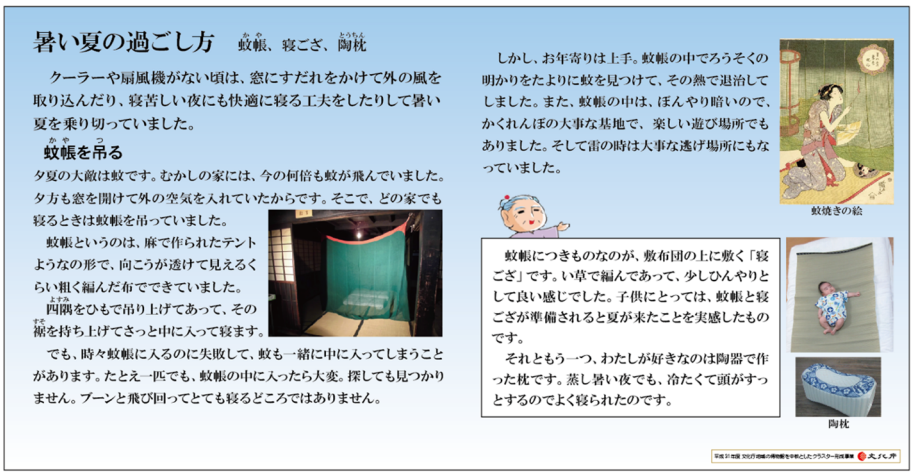
苗が少し育ってくると苗の間に生えた草を取る仕事が始まります。苗を大きく成長させるために雑草を退治する大事な作業です。今はほとんどの田で除草剤を使用しますが、昔は、腰をかがめて、一日じゅう田を歩いて回って手で草を取る大変な作業でした。

大正時代に、らちが使われるようになりました。写真のように機械の歯車の部分が回転して雑草をむしり取って、それを土の中に押し込むのです。また苗と苗の間を耕して根元に新しい空気を送り込んで稲の生育を促しました。昔はこれを「らちをかける」といって、作業が楽になり、苗の成長も助ける便利な農具でした。

苗の小さいときに縦にかけるのを一番らち 1 、次に横方向にかけるのを二番らち 2 、成長したところでもう一度縦にかけるのを三番らち 3 と言いました。最後は人の手で草を取り、らちで荒れた表面をなでて水の通りをよくしました。雑草を取る仕事は7月の井波の太子伝の頃まで続けられました。

らちは、ころがしを使って、縦横に真っすぐに田植えができるようになってから使い始めた農具です。砺波の農機具の会社でも作るようになり、この地方の土地に合った使いやすいらちが考案されました。また、女性や子供でも使いやすい、小ぶりで軽量のらちも製造されるようになりました。

「ラチを使う活動」



暑い夏の過ごし方　蚊帳、寝ござ、陶枕

クーラーや扇風機がない頃は、窓にすだれをかけて外の風を取り込んだり、寝苦しい夜にも快適に寝る工夫をしたりして暑い夏を乗り切っていました。

蚊帳を吊る

夕夏の大敵は蚊です。むかしの家には、今の何倍も蚊が飛んでいました。夕方も窓を開けて外の空気を入れていたからです。そこで、どの家でも寝るときは蚊帳を吊っていました。

蚊帳というのは、麻で作られたテントようなの形で、向こうが透けて見えるくらい粗く編んだ布でできていました。

四隅をひもで吊り上げてあって、その裾を持ち上げてさっと中に入って寝ます。

でも、時々蚊帳に入るのに失敗して、蚊も一緒に中に入ってしまうことがあります。たとえ一匹でも、蚊帳の中に入ったら大変。探しても見つかりません。ブーンと飛び回ってとても寝るどころではありません。

しかし、お年寄りは上手。蚊帳の中でろうそくの明かりをたよりに蚊を見つけて、その熱で退治してしました。また、蚊帳の中は、ほんやり暗いので、かくれんぼの大事な基地で、楽しい遊び場所でもありました。そして雷の時は大事な逃げ場所にもなっていました。

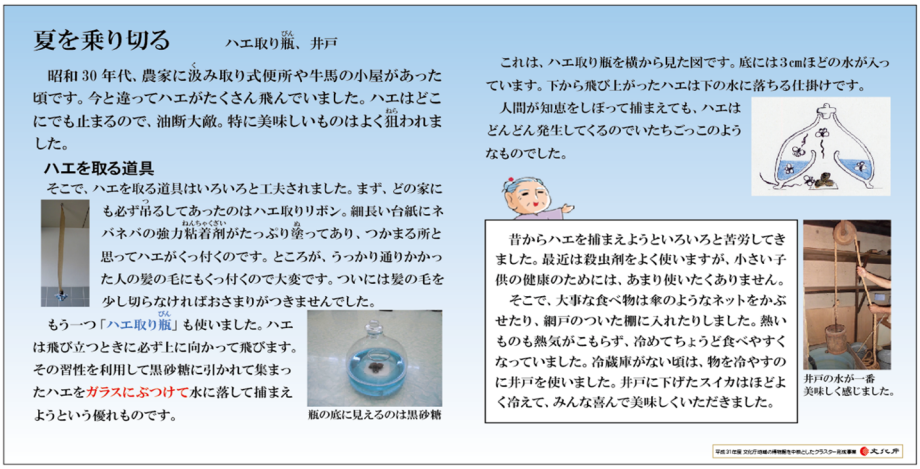
蚊焼きの絵

蚊帳につきものなのが、敷布団の上に敷く「寝ござ」です。い草で編んであって、少しひんやりとして良い感じでした。子供にとっては、蚊帳と寝ござが準備されると夏が来たことを実感したものです。

それともう一つ、わたしが好きなのは陶器で作った枕です。蒸し暑い夜でも、冷たくて頭がすっとするのでよく寝られたのです。

陶枕

「暑い夏の過ごし方」１



夏を乗り切る　ハエ取り瓶、井戸

昭和 30 年代、農家に汲み取り式便所や牛馬の小屋があった頃です。今と違ってハエがたくさん飛んでいました。ハエはどこにでも止まるので、油断大敵。特に美味しいものはよく狙われました。

ハエを取る道具

そこで、ハエを取る道具はいろいろと工夫されました。まず、どの家にも必ず吊るしてあったのはハエ取りリボン。細長い台紙にネバネバの強力粘着剤がたっぷり塗ってあり、つかまる所と思ってハエがくっ付くのです。ところが、うっかり通りかかった人の髪の毛にもくっ付くので大変です。ついには髪の毛を少し切らなければおさまりがつきませんでした。

もう一つ「ハエ取り瓶」も使いました。ハエは飛び立つときに必ず上に向かって飛びます。その習性を利用して黒砂糖に引かれて集まったハエをガラスにぶつけて水に落して捕まえようという優れものです。

瓶の底に見えるのは黒砂糖

これは、ハエ取り瓶を横から見た図です。底には3cmほどの水が入っています。下から飛び上がったハエは下の水に落ちる仕掛けです。

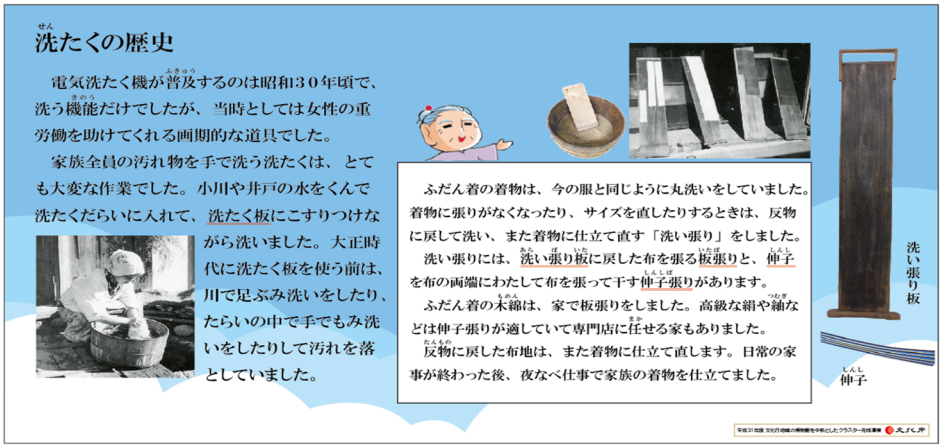
人間が知恵をしぼって捕まえても、ハエはどんどん発生してくるのでいたちごっこのようなものでした。

昔からハエを捕まえようといろいろと苦労してきました。最近は殺虫剤をよく使いますが、小さい子供の健康のためには、あまり使いたくありません。

そこで、大事な食べ物は傘のようなネットをかぶせたり、網戸のついた棚に入れたりしました。熱いものも熱気がこもらず、冷めてちょうど食べやすくなっていました。冷蔵庫がない頃は、物を冷やすのに井戸を使いました。井戸に下げたスイカはほどよく冷えて、みんな喜んで美味しくいただきました。

井戸の水が一番美味しく感じました。

「暑い夏の過ごし方」２



洗たくの歴史

電気洗たく機が普及するのは昭和３０年頃で、洗う機能だけでしたが、当時としては女性の重労働を助けてくれる画期的な道具でした。

家族全員の汚れ物を手で洗う洗たくは、とても大変な作業でした。小川や井戸の水をくんで洗たくだらいに入れて、洗たく板にこすりつけながら洗いました。大正時代に洗たく板を使う前は、川で足ぶみ洗いをしたり、たらいの中で手でもみ洗いをしたりして汚れを落としていました。

ふだん着の着物は、今の服と同じように丸洗いをしていました。着物に張りがなくなったり、サイズを直したりするときは、反物に戻して洗い、また着物に仕立て直す「洗い張り」をしました。

洗い張りには、洗い張り板に戻した布を張る板張りと、伸子を布の両端にわたして布を張って干す伸子張りがあります。

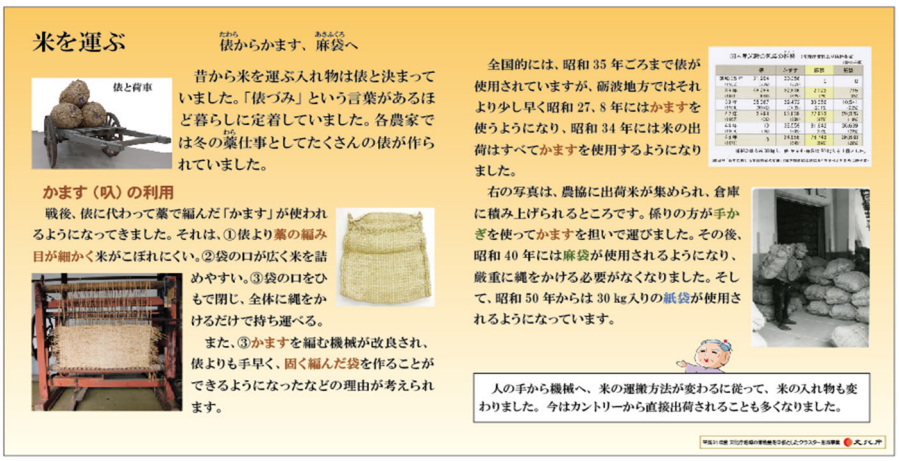
ふだん着の木綿は、家で板張りをしました。高級な絹や紬などは伸子張りが適していて専門店に任せる家もありました。

反物に戻した布地は、また着物に仕立て直します。日常の家事が終わった後、夜なべ仕事で家族の着物を仕立てました。

洗い張り板

伸子

「洗濯の歴史展」から作成



米を運ぶ

俵からかます、麻袋へ

昔から米を運ぶ入れ物は俵と決まっていました。「俵づみ」という言葉があるほど暮らしに定着していました。各農家では冬の藁仕事としてたくさんの俵が作られていました。

俵と荷車

かます（叺）の利用

戦後、俵に代わって藁で編んだ「かます」が使われるようになってきました。それは、①俵より藁の編み目が細かく米がこぼれにくい。②袋の口が広く米を詰めやすい。③袋の口をひもで閉じ、全体に縄をかけるだけで持ち運べる。

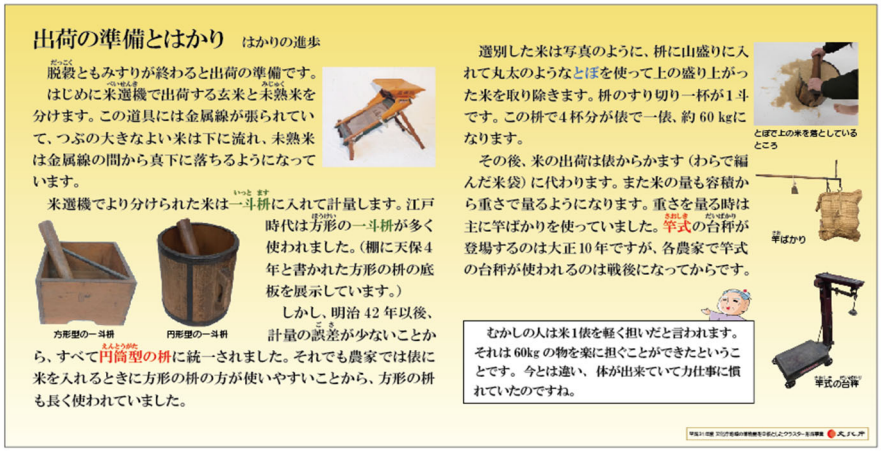
また、③かますを編む機械が改良され、俵よりも手早く、固く編んだ袋を作ることができるようになったなどの理由が考えられます。

全国的には、昭和 35 年ごろまで俵が使用されていますが、砺波地方ではそれより少し早く昭和 27、8 年にはかますを使うようになり、昭和 34 年には米の出荷はすべてかますを使用するようになりました。

右の写真は、農協に出荷米が集められ、倉庫に積み上げられるところです。係りの方が手かぎを使ってかますを担いで運びました。その後、昭和 40 年には麻袋が使用されるようになり、厳重に縄をかける必要がなくなりました。そして、昭和 50 年からは 30 kg入りの紙袋が使用されるようになっています。

人の手から機械へ、米の運搬方法が変わるに従って、米の入れ物も変わりました。今はカントリーから直接出荷されることも多くなりました。

「庭じまい展」１



出荷の準備とはかり

はかりの進歩

脱穀ともみすりが終わると出荷の準備です。

はじめに米選機で出荷する玄米と未熟米を分けます。この道具には金属線が張られていて、つぶの大きなよい米は下に流れ、未熟米は金属線の間から真下に落ちるようになっています。

来選機でより分けられた米は一斗枡に入れて計量します。江戸時代は方形の一斗枡が多く使われました。（棚に天保4年と書かれた方形の枡の底板を展示しています。）

方形型の一斗枡　円形型の一斗枡

しかし、明治 42 年以後、計量の誤差が少ないことから、すべて円筒型の枡に統一されました。それでも農家では俵に米を入れるときに方形の枡の方が使いやすいことから、方形の枡も長く使われていました。

選別した米は写真のように、枡に山盛りに入れて丸太のようなとぼを使って上の盛り上がった米を取り除きます。枡のすり切り一杯が1斗です。この枡で4杯分が俵で一俵、約 60 kgになります。

とぼで上の米を落としているところ

その後、米の出荷は俵からかます（わらで編んだ米袋）に代わります。また米の量も容積から重さで量るようになります。重さを量る時は主に竿ばかりを使っていました。竿式の台秤が登場するのは大正10年ですが、各農家で竿式の台秤が使われるのは戦後になってからです。

竿ばかり

竿式の台秤

むかしの人は米1俵を軽く担いだと言われます。それは 60kg の物を楽に担ぐことができたということです。今とは違い、体が出来ていて力仕事に慣れていたのですね。

「庭じまい展」２

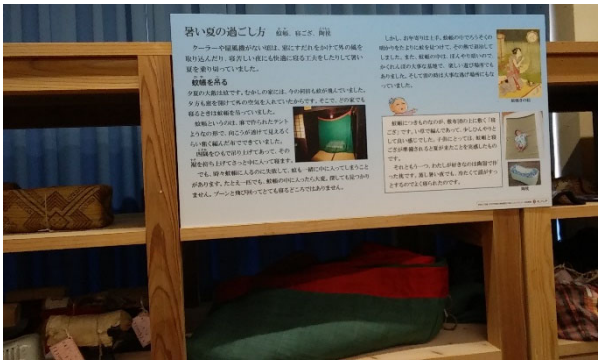
８枚の展示サインを実際にその民具近くに展示している様子

「さつき見舞い」

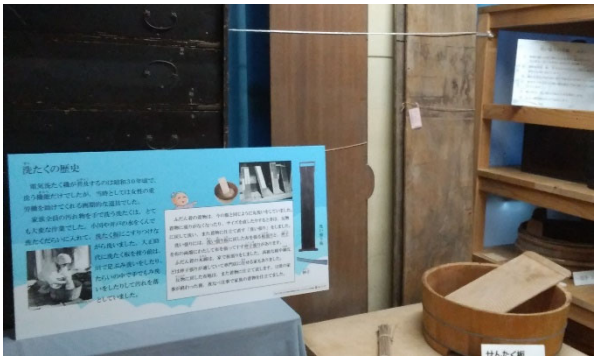
「ラチを使う活動」

「電話の歴史」

「暑い夏の過ごし方」１



「暑い夏の過ごし方」２



「洗濯の歴史展」

「庭じまい展」１

「庭じまい展」２